

大正十二年一月二十七日創刊 第三種郵便物認可
昭和二年三月二日発行 (毎月一回二日発行)
昭和二十三年二月七日創刊 第三種郵便物認可 第六号
第九十九巻 第三号

木 醉 馬

3 月



夜蛙や電車故障の帰途更けて

秋櫻子

『玄魚』

移居後間もない西荻窪は武蔵野の面影をまだ色濃く残していた。春には溝で蛙が鳴きそれが過ぎると地虫が鳴く。思わぬことで遅くなってしまった。人々の渦とともに急いで駅を出る。しつとりとした小暗い道を街燈の朧を辿って家路につく。励ますように鳴き続ける蛙の声も心強い。掲句のほかに『玄魚』には「蛙田へ坂下り来しがあてもなし」のように周辺を詠んだものがある。

小野恵美子

真青

徳田千鶴子



八度目の年女にて目の力
口下手と聞き上手ゐる初笑

肩触れしのみふたりや細雪

武蔵野の空を拡ぐる親子凧

阿弥陀堂白山吹を散り敷ける

ならはしの疎かならず豆を撒く

如雨露より虹の生まれて春浅し

三月集



凍蝶 松田多朗

霜の朝人ひく犬の息荒し
鉤の手の町筋さびれ年の暮
凍蝶と決めこみ花に動かざる
山国の日の入りはやし枇杷の花
裏木戸に迫る海あり花八手

紅椿 松本美簾

読初の一書と決めて枕もと
墨痕の滲みほどよき寒の明
紅白に南天束ね城下町
八重一重師の墓所明り紅椿
岬端の手製ふらここ雨休み

身ほとり 兼久ちわき

足し湯して身ほとりに柚子集めけり
行止りの自刃の墓や寒椿
冬霧や汽笛そそれる旅ごころ
冬うらら延命水のはしごして
初雀マリアの水へ来て遊ぶ

初霞 久留米脩二

納骨の終りし峡のしぐれけり
鬼柚子湯へ鬼天竺鼠かな
むらさきに筑波二峰の初霞
初筑波子の新居より拝しけり
百歳の謝意の添書年賀状

餅間 斉木永久

鏡割り床に正座の豆剣士
元旦の街のしづけさ日は高し
餅間の白粥うまし吹き窪め
北風の梳く寄生木の深みどり
林立の冬木に数の巣箱かな

寒満月 渡会昌広

澄みわたる寒満月や秘境の湯
凧や旅姿なる芭蕉像
峡の家庭木の霧水かがやけり
銀杏黄葉にまな裏染めて塔仰ぐ
枯れし野の音聴くさまに観世音

寒の空 渡部良子 静寂 一 民江

ポインセチア一憂過ぐる面ほてる
侘助を活けつつ深む喪のこころ
万両や吾子を頼りの昨日けふ
愛犬を真中に笑まふ一賀状
ドクターへり帰途の寒天暇もなし

針に糸素直に通る二日かな
懸想文恐るおそるに開きけり
高千穂の闇深々と神楽笛
一刀彫の盤跡美しき深雪晴
寒雁の夜の静寂を固めたり

あらたまの 大上充子 根深汁 白井友梨

あらたまの港に競ひ大漁旗
乗り継いで着くふる里や粉雪舞ひ
餅丸くまるくと祖母のこゑ耳に
出稼ぎの父待つ駅の雪だるま
畳なはる紫紺の山や田鶴のこゑ

冬萌や小さきしあはせ重ねつつ
梅ふふむ銜をつなぐ山ふたつ
ふくろふを聞きたる耳に風残り
息災てふ日々を賜り根深汁
文机のルーペの光る春隣

風雪十五句

千鶴子選

炊煙のひとすぢ青し雪野原	夫の忌や二夜ねかせし鯽大根	マフラーは赤逢ひたき人のあるごとく	発止と打つ鼓火のごと寒稽古	城山をそびらに尖る枯蓮	淑気満つ雪を翼に伏臥松	芹摘むや朝日たたへて棚田水	どこまでも見ゆる通夜の灯返り花	仰ぐほど色のうするる冬ざくら	おはじきを知らぬ子ばかり置炬燵	笈摺の八苦を修め山眠る	野ざらしの古墳小島の虎落笛	仁王尊三寒の畔四温の阿	校庭の端はみづうみ大根干す	塩問屋の蔵がらんどろ榴熟れ
夏生 一暁	小林 千草	小坂優美子	鈴木 幾久	板坂 良子	岡崎 郁子	能勢 俊子	川村 清子	緑川 啓子	倉科 紫光	山口貴志子	木下 慈子	神谷 文子	市村 明代	川内谷育代

あつという間に令和二年の一月も終わろうとしています。この調子だと、東京オリピックも、もうすぐですね。

それにしても、コロナウィルス。波及を防げるのでしょうか。東京と同じ人口の武漢市を閉鎖のニュース、日本では不可能な話です。必要以上にこわがる事はないのですが、注意は十分にしなければと思います。

百僧の百の転読 初松籟 早川俊久

百人の僧の読誦。私は京都大原で声明を聞いた経験しかないが、その澄んだ声楽が印象深かった。百人の僧の転読は、迫力あるに違いない。私は音と音の措辞を重ねるのは疑問なのだが、此の句の清々しさをいいと思う。

ひとはげの雲より薄く紙を漉く 大杉映美

ひとはげで薄雲なのはわかる。が、感覚の薄さだ。だが、紙漉きを見て、その作業に薄雲を譬えたのが手柄。私も昔、祖父の吟行に加わって、埼玉県の小川町に紙漉きを見た経験がある。小学生だったので、仔細は覚えていないが、紙漉き工房はしっかりと覚えてる。寒さの中の繊細な作業。和紙に手触れるたびに思い出すし、手作業の重さ辛さを思う。失われたくない伝統を、国はもつと守ってほしい。

胸に散り胸に火のつく冬紅葉 恩田洋子

激しさのある句でありながら、閑けさもある。それは「冬紅葉」という季語の為。美しい紅葉の候を過ぎ寂びても逆に残る紅葉の美しさは、滅ぶ寸前の明滅に近い。作者の心が伝わる句と思う。

掃納して静かなる空のいろ 若見洋子

大晦日、新しい年を迎える前の最後の掃除。ほっと一息ついて見上げる空。空と共に作者の気持も、安堵と静けさの中にあるに違いない。

寒月光一人を生きて悲しまず 岡田康子

季語でいただいた。この方がどんな人生を歩んでいられるのかは、わからない。でも「寒月光」には深い意味があると思った。季語に「寒月」はあっても「寒月光」はないが、此の句は「寒月光」でなければと思う。
厳しい寒さの中の月の光、下十二に強さを感じ、頑張ってねと思う。

泣く事とちがふかなしみ枇杷の花 古澤春美

へもう声の届かぬ遠き冬帽子。二句並べると、ご主人を亡くされた辛さが伝わる。うかがうところ、二十年以上の闘病だったそうで、徐々に覚悟していらしたのかも知れない。「枇杷の花」の地味だがほのかに明るい色。そこにより一層の悲しみを感じる。

応へなき弥陀に事問ふ寒さかな 北元多加

応えなどないと知りつつ問う心。へ寒さがいいと思う。わかりつつ、でも問うという内容の句は誰かが詠んでいるかもしれない。しかし「寒さ」で、日常から一步深まった。

馬酔木集

徳田千鶴子 選



霜月祭神の降り来る荒筵
我が齢かりそめならず初明り
百僧の百の転読初松籟
戸隠の天に連なる凍豆腐

浜

松 早川

俊久

かはがらす楮晒しの瀬を躲し
ひとクラス呑む縄跳びの片男波
時雨るるや抱へ小走る御仏供米
暖冬の湖を漁る投網かな

石

川 小坂

栄治

目指すもの今も変はらず冬木の芽
紙漉の指にからまる水の黙
ひとはけの雲より薄く紙を漉く
息白く言葉に花を咲かせけり

西

宮 大杉

映美

白息をゆるやかに吐く野外ヨガ
竜の玉言ひたき言葉目の奥に
琴の音や葉擦れの影の白障子
掃納して静かなる空のいろ

京

都 若見

洋子

二の酉の風も加はる手締の輪
鯛焼を買つてしまひし急ぎ足
塩引鮭のかみつきさうな貌愛づる
胸に散り胸に火のつく冬紅葉

東

京 恩田

洋子

青写真背山騎らす雲もなし
白鳥の鬩擾々と日の出前
凜冽と湖晴れ渡る枯葎
漱石の本籍地の碑冬日向

北

海 道 天田

牽牛子